

哲学者たちの天球——目

次

序章 搖籃期の自然哲学 …………… 1

- 1 アリストテレスの子供たち——イブン・ルシュドとアルベルトゥス 4
- 2 「十二世紀ルネサンス」を超えて——西欧における学問環境の変化 9
- 3 アリストテレス主義——イブン・ルシュドの知的遺産と古代の註解者たち 15
- 4 天界と月下界とのつながりという争点 21
- 5 各章の概要 25

第1章 神的な天体 …………… 27

- アリストテレス主義の〈宇宙神学〉
- 1 アリストテレスの神学の諸相 29
 - 2 天界と神的なもの——アリストテレス『天界について』第一卷第三章・第九章 37
 - 3 天界の神的なものにかんする〈古代の註解者〉の見解 42
 - 4 天の神々とヘルメス主義——『天界について』第一卷第三章 46
 - 5 天外の生命体と宇宙の第一原因——『天界について』第一卷第九章 54

第2章 天体の魂 …………… 62

——「天は生きている」という思想

1 「第一動者」とは何か——『自然学』第八巻の註解 65

2 星々の生命——アリストテレス『天界について』第二巻第二章・第十二章 75

3 『形而上学』第十二巻における天の魂の問題 86

4 アフロディシアスのアレクサンドロスにおける天の生命の問題 93

5 天の熱と宇宙の生理学的分析 97

第3章 自然に秩序を与えるのは何ものか …………… 107

——アリストテレス主義の〈摂理論〉

1 哲学者たちの摂理論にたいする神学者たちの批判 110

2 キリスト教神学における摂理論 113

3 アリストテレス主義における神的摂理 121

第4章 元素の生成変化 …………… 133

——中世物質論の基礎

1 アリストテレス『生成消滅論』における〈元素論〉 136

2 イブン・ルシュドの〈物質主義的〉立場 142

3 アルベルトゥスの〈形而上学的〉立場 154

第5章 熱と自然発生 162

——『気象論』第四卷における生成の一般理論

1 自然の事物の生成と「熱」のはたらき 165

2 自然発生と生成の一般理論 176

第6章 形成力 183

——天界と自然界とをつなぐもの

1 形成力、あるいは鉱物を生み出す〈製作者〉 185

2 動物発生と天の知性 191

3 アリストテレスとプラトンとの思想的一致 194

4 生成変化の形而上学的基礎 197

第7章 アリストテレスの擁護者たち 202

——残存するスコラ自然哲学

1 アリストテレス主義という母胎——イブン・ルシュドの世界像 204

2 アリストテレスの擁護者たち——ポンポナツツイ、スカリゲル、メラシヒトン 210

終章 222

索引	参考文献	註	あとがき
卷末 1	卷末 4	卷末 38	231

凡 例

一、引用文中の傍点は、特記のないかぎり引用者による。
一、引用文中の「」は引用者による補足を、「〔 〕」は原典およびその近代語訳での補足を意味する。

序 章 揺籃期の自然哲学

長いあいだ、いまの西ヨーロッパでもアルプスより北の地域は、文明の周縁におかれた辺鄙な土地でしかなかった。その地で、社会の発展とともに学問が栄えはじめるのは、ようやく十二世紀半ばを過ぎてからのことだった。

その時代のヨーロッパ大陸を俯瞰すると、いまとは異なる風景が姿をあらわす。⁽¹⁾十二世紀のスペインの南半分は、イスラーム教の王朝によって治められていた。その王朝下で主として話されていた言葉はアラビア語だった。また、同じ世紀の前半には南イタリア周辺にシチリア王国が成立し、その国内ではギリシア語、アラビア語、そしてラテン語が併用されていた。フランスやドイツにあたる地域も、現在のような統一的な国家体制のもとで統治されていたわけではなかった。つまり、端的な歴史の事実として、その時代の西ヨーロッパは、いま私たちが当然視する地域や国家のあり方とはだいぶ様子が異なっていたのだ。国家制度だけではない。経済的にも、そして文化的にも、この本がかかわる十二、十三世紀の西欧は、あらゆる点で文明の揺籃期でしかなかったのである。⁽²⁾

イスラーム勢力によって支配されていない地域の西欧では、古代ローマの時代以来、主な公用語はラテン語だった。そのような西ヨーロッパにおける十二世紀からの学問復興は、当時先進的であったアラビア語文化圏からの知の伝達に、その多くを負っていた。その状況は日本列島の学問が、明治期より前は中国や朝鮮、それより後の時代は欧米に依存してきたのと似ている。アラビア語文化圏から西欧への知の伝達を促したのは、右で記したような複

数の言語が並存するシチリアやスペイン南部で生じた翻訳運動であった。

だが、この知の移動を、書物が東から西へ、そして南から北へと物理的に移動しただけと捉えるのでは不十分である。民族も宗教も異なるギリシアとアラビアの地からラテン語文化圏へと、文物が突如大量に到来したとき、その受容の局面には〈政治的〉な——政治哲学者のカール・シュミットにならえば〈友〉と〈敵〉との関係にも喩えられる——衝突や緊張関係が思想的な文脈でも遍在していたからだ³⁾。ただし、誤解のないようにあらかじめ注記すれば、この友敵関係として私の念頭にあるのは、キリスト教世界とイスラーム教世界との対立ではない。本書が一貫して強調するのは、古代ギリシア由来の哲学的思想と西欧のキリスト教神学を軸とした世界像との間に、容易には解消しえない対立点があったということである。

以上を簡単な前置きとして、本書の目的を記すことにしよう。この本が目指すのは、西欧文明の揺籃期にあたる十二・十三世紀に、アラビア語およびギリシア語からラテン語への翻訳運動をきっかけとして、その地の「自然哲学」がどのように成立したのかを明らかにすることである。ここでの「自然哲学」とは、数理的科學に限らず、自然の諸事物の運動や変化、天文的な現象、そして生命体のはたらしきなどを考察する近代以前の学問一般を広く指す⁴⁾。十二世紀から十三世紀にかけて、大量の書物が西欧へと流れこんだ。その受容の結果、十六世紀末以降の近代的な科學に取って代わられるまで三、四世紀間にわたりヨーロッパの知識人たちが共有することになる、自然現象や宇宙にかんする諸理論が確立することになる。本書では、このようにして西欧で新たに学問が栄えはじめたとき、理論的な緊張関係のなかでいったい何が重視され、他方でいったい何が捨象されたのか、そしてその結果として古來からの学問がどのように変容し、新しい世界像を生み出すことになったのかを検討される。

十二・十三世紀のヨーロッパの「自然哲学」は、一人の古代ギリシアの哲学者の著作をもとに成立していた。その哲学者とは、紀元前四世紀に活動したアリストテレスに他ならない。詳しくは後述するが、アリストテレスの著作の大半は、アラビア語文化圏では広く受容されていた一方で、ラテン語文化圏には長らく伝わっていなかった。

それゆえ、十二世紀末の翻訳運動により彼の著作が西欧へともたらされたときも、直接ギリシア語からよりも、むしろ先にアラビア語からラテン語への翻訳をとおして広まったほどだ。

本書の論述の大半は、翻訳を経て文化間を移動したアリストテレスの著作がどのように解釈され、そこからいかなる世界像が生まれたのかを分析することにある。アリストテレスを読み、解釈した者たちのなかでも特に本書が注目するのは、十二・十三世紀に活躍した二人の知識人、すなわちイブン・ルシユド（ラテン語名ではアヴェロエス）（一一二六年～一一九八年）とアルベルトゥス・マグヌス（一一二〇年頃～一二八〇年）である。^③とはいえ、この本では、彼ら自身の思想の固有性を描きだすことよりも、むしろこの時代に成立した一般的な思潮を、彼らの著作の分析をとおして浮かび上がらせることに主眼が置かれるだろう。

現代の「哲学」は、他の学問分野と同様に非常に専門化が進んでいる。だが、少なくとも十八世紀頃までの哲学は、認識論や形而上学といった特定の領域を主戦場とするだけの学問ではなかった。^④古くから別の伝統を形成していた法学、医学、神学をのぞいた知的領域の大半、すなわち現在の区分で言えば、物理学や化学、生物学などの自然諸科学、政治学や経済学などの社会科学の領域もうちを含む包括的な学の体系であった。^⑤過去の哲学が広範な対象にかかわっていたことは、次のような事例を想起すれば容易に理解されるだろう。たとえば、万有引力の法則で有名なアイザック・ニュートンの名著『プリンキピア』の完全なタイトルは、『自然哲学の数学的諸原理』であった。また近代経済学の始祖の一人であるアダム・スミスが大学で教えていたのは「道德哲学」（モラル・フィロソフィー）だった。現代では、ニュートンは物理学者、スミスは経済学者に分類される。だが、彼らは二人とも古代以来の「哲学」の伝統の上になつて自身の思想を展開していたのである。

重要なことは、そのような十七世紀頃までつづいた包括的な学問としての「哲学」の礎をほぼ一人で築きあげたのが、すでに触れたように、古代ギリシアの哲学者アリストテレスであったということだ。本書の主人公の二人、イブン・ルシユドとアルベルトゥスは、この古代の哲学者の著作を土台とした知的伝統——簡潔に表現すれば「ア

リストテレス主義」——が、十二世紀以後の西欧の地で確立されたときに、決定的な役割を果たした人物たちなのである。⁸⁾

そして、本書の副題に含まれる「スコラ(学)」(scholastic/scholasticism)という言葉は、西ヨーロッパの学問が十二世紀までは主に修道院にて、そして十三世紀以降は、後段でも説明するように、大学を中心に発展するなかで、とりわけ理性的推論を方法的な原則として学ばれた哲学および神学的体系や、それと関連した知の営みを意味する⁹⁾。そのなかでも本書で「スコラ(学)」と記す場合、特に十三世紀から十六世紀にかけての大学で支配的だったリストテレス主義的な学問を指すものとして用いる。

以下、この序章では、本論での詳細なテクスト分析にとりかかるまえに、本書全体の前提となる基本事項をいくつか確認する。主人公であるイブン・ルシユドとアルベルトゥスの簡単な紹介と本書の方法論にかんする説明のあと、その二人が置かれていた知的文脈を、特に十二・十三世紀の西欧における学問環境の変化にそくして概観する。次に、彼らの著作の内実を理解するために必須となる「アリストテレス主義」について近年の研究動向を中心に手短かに紹介し、さらに本書のタイトルにも入っている「天球」(sphaera caelestis)——本書でより用いられる表現で言えば「天体」(corpus caeleste)——が哲学的な問題であった背景を論じる。最後に、本書の各章の要点を述べることで、本書全体の見通しをあらかじめ示すことにしよう。

1 アリストテレスの子供たち——イブン・ルシユドとアルベルトゥス

西欧中世の知識人たちは、どのように自然現象や宇宙の仕組みを理解していたのか、すなわちいかなる「自然哲学」を有していたのか。それが、本書を貫く最も大きな問いである。ただし、当時の自然観を明らかにしようとす

る場合、どの観点から議論がなされるべきかとなると、多くの方法や視点が考えられうる。

このような主題は、伝統的には科学史家と呼ばれる人たちが取りこんできたテーマである。特に前世紀の古典的な科学史研究では、コペルニクス、ガリレイ、ニュートンといった、いわゆる近世の「科学革命」の立役者たちによる思想の転換が重視された。^⑩ その転換を示す代表例として、天動説から地動説への転回や原子論の隆盛をあげることができる。おのずから、その知的革命に先立つ中世思想にかなする研究でも、近代科学の先駆者たち、あるいはその思想的な萌芽を究明することが重視された。要するに、コペルニクスによる宇宙像の転換やガリレイやニュートンの近代的力学と比較されるかたちで、自然や宇宙にかなする中世人の考えが分析され、評価されていたのである。^⑪

だが、本書ではそのような古典的な科学史研究とは異なる道筋から考察が行われる。主に取りあげるのは、すでに示唆したように、アリストテレス由来の自然哲学の伝統である。彼の著作は、二度も著作集全体が邦訳されているが、その書名を一瞥するだけでも感じとられるのは、彼の著作集の半分以上を、さまざまな自然現象や生物などを論じた自然科学的な作品が占めていることである。具体的なタイトルをあげれば『自然学』『天界について』『生成消滅論』『気象論』、そして一連の「動物論」が、その部類の著作にあたる。また、後続の章で論じるように『形而上学』でも、彼の宇宙論を考えるうえで無視できない重要な考察が見られる。

ただし、アリストテレスの自然哲学には、後世の科学で主流となる数理的な分析がほぼ欠落している。その欠落は、この自然科学的伝統にかなする研究が、少なくとも前世紀の科学史家たちのあいだでは低調であった理由の一つかもしれない。他方で、現代の哲学者たちの多くも——一部の「科学哲学者」は例外として——自然科学的な主題を関心の外に置いていたために、中世の自然哲学の諸側面を軽視してきた。^⑫ 本書でのアリストテレス主義への注視は、哲学史および科学史双方の分野の研究史的な空隙を埋める役割も果たすことになるだろう。

さて、本書の主人公、イブン・ルシユドとアルベルトゥス・マグヌスの両者は、まさにアリストテレスの著作を

もとに自然現象を考察した知識人であった。そのかぎり、優れた啓蒙書であるルーベンス・スタインの著書『中世の覚醒』にならって、彼ら二人を「アリストテレスの子供たち」(Aristotle's Children)と形容することもできる¹⁴⁾。

本書の内容とかわる範囲で、この二人の簡単な紹介をつけよう。一人目のイブン・ルシュドは、十二世紀にスペインのコルドバで生まれ、その地で活躍した哲学者、法学者、そして医学者だった¹⁵⁾。このように彼は多彩な分野に従事する知識人だったが、その名が歴史に刻まれているのは、他の何よりも彼がアリストテレスの著作にかんする特権的な立場の解釈者であつたからだ。十三世紀以降、ラテン語で「哲学者」(Philosophus)といえはアリストテレスその人を排他的に指していたのと同様に、「註解者」(Commentator)といえは、他の誰でもなくイブン・ルシュドすなわちアヴェロエスを意味していたのである。彼は、アリストテレスの著作にアラビア語で詳細な註釈をほどこし、それがラテン語訳され普及することで、後世のヨーロッパの知識人に圧倒的な影響を与えた。

ここで読者は疑問を抱かれるかもしれない。アラビア語で執筆したイブン・ルシュドを扱うのに、なぜこの研究の対象を主に「西欧」という地理的区分へと限定するのか、と。たしかに、イブン・ルシュドはアラビア語話者であり、その言語で執筆もおこなつた。とはいえ、彼が活動したのは、イスラーム教の王朝によって統治されていた時代のスペイン南部であつた。そして、何よりも重要な点は、彼の著作が、イスラーム世界あるいはアラビア語文化圏よりも、主に西欧のラテン語文化圏で受容されたことである。本書がアラビア語話者のイブン・ルシュドを議論の中心におきつつも、地理的な視点としては「西欧」の枠で話を進めるのは、このような彼の著作の受容の特殊性を大きな要因としている。本書では本来のアラビア語名を尊重する意味でイブン・ルシュドという名を使用するが、彼の西欧世界での影響を考える際にはアヴェロエス(主義)という言葉も用いる。また、本書では、彼の著作についても基本的にラテン語訳されたものをもとに議論を進める。

さて、もう一人のアルベルトゥス・マグヌスは、十三世紀のパリやケルンで活躍したキリスト教神学者であつた¹⁶⁾。彼は、『神学大全』の著者であるトマス・アクイナス(一二二五年頃～一二七四年)の師としても知られる。アルベ

ルトゥスは、キリスト教神学にかかわる多数の作品も残したが、本書で考察したいのは彼のアリストテレス主義者としての側面である。彼はラテン語文化圏においてはじめてアリストテレスの著作集全体にたいする包括かつ非常に詳細な註釈をほどこし、その著作が後続の知識人たちにとっても規範となった人物だった。イブン・ルシュドとアルベルトゥスの両者は「アリストテレスの子供たち」の中世における代表的存在として、十二世紀から十七世紀までのアリストテレス主義の成立に大きく貢献した者たちなのである。

イブン・ルシュドとアルベルトゥスは、彼らが生きた社会的環境や人生の境遇についていえば、たしかに大きく異なっていた。再度要点を述べれば、前者は、イスラーム教の王朝であるムワッヒド朝下のスペインで活躍した法学者兼医学者でもあり、後者は托鉢修道会の一つであるドミニコ会に所属する神学者であった。言語的にも、一方はアラビア語で、他方はラテン語でそれぞれ著作を残したように、彼らが日常を送る生活世界も異なっていた。しかし、彼らはアリストテレスの著作という知的基盤をもとに自らの思想を展開したことで、そのような相違を超えた共通の地平の上にも立っていたのである。

さて、私が「アリストテレスの子供たち」という側面をことさら強調するのは、彼ら二人の思想や立場をとらえるにはどのような視角から接近すべきかという、本書全体の方法論とも密接にかかわるからである。近代の知識人たちの思想を探る場合、まず要求されるのは彼あるいは彼女の著作をその内的な論理にしたがつて丹念に読みこむ作業であろう。その作業で前提となっているのは、ある思想家の著作では、その人物のオリジナルな「思想」あるいは「内面」が忠実に表現されているという考えであるように思われる。だが、イブン・ルシュドとアルベルトゥスの場合、彼らの著作の内的な論理をたどることはもちろん重要だが、残念ながらそれだけでは、彼らの立場を把握することは困難である。本書であつかう彼らの著作は、アリストテレスの著作の「註解」(commentarium)、日常表現に近い言葉でいえば「解説」として書かれている。それが意味するのは、アリストテレスが何を述べているのかを解説し説明することが彼ら二人の註解書の一次的な目的であったということだ。そうであれば、解釈した側で

ある二人の思想を見いだそうとする場合、私たちはアリストテレスの元々のテキストと、彼ら註解者たちの解釈とを慎重に腑分けしつつ、それらの間にある相違を注視する必要があるのである。⁽¹⁸⁾

こうして本書では、アリストテレスの著作を〈地〉とし、イブン・ルシュドとアルベルトゥスのテキストを〈図〉と見立てるならば、その〈地〉から〈図〉がいかに生成したのか、そして両者の間にどのような類似と相違とが見出されるのが執拗に分析される。だが、そのように見立てる時、アリストテレスのテキストがすでに確固とした意味をもつていて、それを前提として後世の二人が自身の見解を述べたと想定することは誤りである。原語であれ翻訳であれ一読すれば容易に感じとられるように、アリストテレスの著作はそれ自身が内部に論理的な矛盾や内容の齟齬を抱えた多義的なテキストであった。彼自身が何を主張したのかという〈地〉も、あらかじめ確定したものでなかった。〈地〉と目されるものは、後世の解釈という〈図〉をとおして、遡及的に私たちの前に姿を現すものでしかないのである。

とはいえ、イブン・ルシュドとアルベルトゥスの註解は、単にアリストテレスの文言を説明することに終始する作業であったのではない。この点で、イブン・ルシュドの自然思想についての先駆的な業績を残したルス・グラスナーが表現したように、彼らの解釈行為はテキストの「釈義をとおした科学」(science through cregasis)であつたと理解する方が適切である。⁽¹⁹⁾つまり、たしかに、イブン・ルシュドとアルベルトゥスとはアリストテレスの著作を解釈し説明する作品を残した。だが、そこで彼らが試みたのは、単にこの古代ギリシアの哲学者の文言を正しく解釈することだけではなかった。むしろ、その作業をとおして、この世界の真実そのものを解明しようとしたのである。現代であれば科学者が実験や自然現象の観察、数学的推論などでおこなう作業を、彼ら二人はアリストテレスの文言の解釈を基礎にして達成しようとしていたのだ。

2 「十二世紀ルネサンス」を超えて——西欧における学問環境の変化

次にこの節では視野をすこし広げ、イブン・ルシウドとアルベルトゥスが活動した時代の、とくに学問をめぐる知的状況について、いわゆる「十二世紀ルネサンス」の視点から説明をおこなう。²⁰

十二世紀と十三世紀は、西欧の観点から見ると文化の大きな変動期であった。冒頭でも触れたように、文明の周縁地帯でしかなかった西ヨーロッパで、十二世紀をさかいに突如文化の隆盛が生じた。その文化的な復興は、アメリカの歴史家チャールズ・ハスキンズの著作が発表されて以来、「十二世紀ルネサンス」と一般に称されている。

一般に、ルネサンスといえば、十五世紀前後にイタリアを中心に生じた古典的文芸・芸術の復興運動を多くの人々は想起するはずだ。しかし、それに先立つ十二世紀から十三世紀にかけての西欧でも、都市の発展と連動した文化の隆盛が見られたのである。ハスキンズの議論が発表されてからすでに半世紀以上の年月が経過しており、各論においては修正を要する部分も少なくない。だが、彼が議論し結論づけたことの多くは、この時代を考える者たちの視座を規定しつづけている。

この節では、ハスキンズ自身の議論にときおり言及しつつ、本書の主人公である二人の知識人が活動した歴史状況となる「十二世紀ルネサンス」以後の知的環境について、次の三点に焦点を絞って紹介をおこないたい。その三点とは、〈アラビア語文化圏からの学知の流入〉、〈大学の誕生〉、そして〈学知の体系化・組織化〉である。

アラビア語文化圏からの学知の流入

西欧の理論的な学問が、その起源の多くを古代ギリシアとローマに負っていることは事実である。このような学問の礎を築いた古代の賢人たちとしては、すでに述べたアリストテレスやその師のプラトンといった哲学者たちだ

けではなく、エウクレイデス（ユークリッド）やプトレマイオスのような数学者・天文学者、さらにはヒポクラテスやガレノスなどの医学者を例としてあげることができる。

だが、右に記した古代の賢人たちが創始した学問の多くは、十二世紀までの西ヨーロッパではほとんど知られていなかった。プラトンの著作でまともに読まれていたのは、宇宙の創成を論じた『ティマイオス』のみであり、アリストテレスの著作は『命題論』と『カテゴリー論』など一部の論理学的著作——それらの著作は「オルガノン」と呼ばれる——が入手可能であったにすぎない。エウクレイデスの数学書や他の医学的著作も、十二世紀までの西欧ではほぼ読まれていなかった。

ところが、そのような状況が十二世紀から十三世紀にかけて劇的に変わりはじめた。現在のスペイン南部やシチリアなど、アラビア語文化圏とラテン語文化圏との隣接地帯において精力的な翻訳運動が生じ、結果的に多くの哲学的・科学的著作がラテン語訳されたからである。²¹⁾ もともとギリシア語で書かれた著作であっても、直接ギリシア語から翻訳されるよりも、アラビア語の翻訳からラテン語訳される場合も少なくなかった。

この翻訳運動でラテン語訳された著作群としては、それまで西欧にはなかった自然科学的な作品が、後世への影響という点では特に重要な意味をもっていた。²²⁾ ハスキンズも『十二世紀のルネサンス』のなかで科学の復興を論じ、十三世紀初頭からおよそ百年のあいだに「エウクレイデスとプトレマイオス、アラビア人の数学と天文学、ガレノス、ヒポクラテス、アヴィセンナの医学、そしてアリストテレスの百科事典的に豊かな学識」が西欧へともたらされた²³⁾と述べている。それらの著作が翻訳されるまで、西欧人が自然世界や宇宙について理論的に語る場合、人々はもっぱら聖書の記述にもとづいていたと言っても過言ではないのだ。

ただし、右で引用したハスキンズの説明には誤解を招きかねない記述がある。というのも、たしかにエウクレイデスの『原論』は、十二世紀の早い時点でラテン語訳され、西欧において受容された。だが、それ以外の著者のテクストとなると、本格的な翻訳と受容が見られたのはより後の時代でしかなかったのである。たとえば、十七世紀

5 各章の概要

では、最後に本書の各章の内容についてあらかじめ概要を説明して、この序章を終えることにしたい。まず第1章では、アリストテレスのいう「神」と天界とのかわりが論じられる。宇宙や自然世界について論じる本書が神を主題とする章から始まるのは奇妙な印象を与えるかもしれない。だが、「神」あるいは「神的なもの」を天界とのかかわりでどのように位置づけるか、また神のこの世界への関与をどのように規定するかが、後のアリストテレス主義者たちの自然理解を探るうえで決定的な意味を有していたのである。第1章では、天体そのものが神的なものと理解される〈宇宙神学〉と形容できる立場がアリストテレス主義の内部に存在していたことが論じられる。

第2章では、天体自体が「魂」を有している、あるいは天体が「生きている」とイブン・ルシュドとアルベルトウスが考えた思想的な背景を探る。天体が生命活動を有しているという思想は、実はアリストテレス自身によって主張されていたものであった。だが、イブン・ルシュドとアルベルトウスは、そのようなアリストテレスの言及を単に反復するだけでなく、その天体が有している魂の本性を複数の著作でくり返し論じた。

第3章は、そもそもなぜ天界が神的なものであり、魂を有する生命体であると考えられる必要があったのかという理由を、「神的摂理」にかんするアリストテレス主義的伝統と、それに対するキリスト教神学者からの批判を検討することで明らかにする。この世界が神的なものによって一つの秩序を与えられている、という発想自体は普遍的に見られるとしても、その際の神的なものの正体をどのように規定するかがアリストテレス主義者とキリスト教神学者の間では異なっていたのである。

第1章から第3章までは天界の問題が議論の主題となるが、第4章と第5章はその天界の影響を受ける側であった月下の世界にかんする思想が考察される。第4章では、月下界を構成する四元素の変化が論じられる。四元素と

は、火・空気・水・土の四つであり、アリストテレスとその追従者たちは、それらの四元素がこの自然世界とその現象を構成している物質的な原因であると考えていた。この章で焦点が当てられるのは、この四元素の基本的な変化である「生成・消滅」である。この議論をおおして、イブン・ルシュドが自然の事物の変化を元素の諸性質へと還元する物質主義的な立場をとっていたこと、それに対してアルベルトゥスが反物質主義的な立場をとっていたことが示される。

第5章では、主にアリストテレスの『気象論』第四巻にかんするアルベルトゥスの議論を考察する。この『気象論』第四巻は、アリストテレスの著作のなかでは異質な存在であり、真正性を疑う論者もいるほどである。なぜなら、この巻では自然現象全般が、熱と他の基本的な性質との相互作用で説明されるなど、原子論的な立場が展開されているからだ。特に、生殖を欠いて動植物が生まれる「自然発生」の議論を取りあげること、自然現象の生起にかんするアルベルトゥスの理論と、彼のイブン・ルシュド批判とを論じていく。

第6章では、天界に由来し、この自然世界の事物を形成する役割を果たす「形成力」(virtus formativa)と呼ばれる概念が、アルベルトゥスの広範な著作で言及されていることを、複数の著作を横断的に検討することで論じていく。それによって、アルベルトゥスの自然理解を象徴する「自然のすべての作品は知性の作品である」という句が意味するところも明らかになるだろう。

第7章では、イブン・ルシュドおよびアルベルトゥスの議論から浮かび上がった「アリストテレス(主義)哲学」を踏まえ、その世界像が後世の哲学的伝統においてどのように議論の前提となっていたのかを、三人の思想家たち、すなわちピエトロ・ポナナツィ、ユリウス・カエサル・スカリゲル、フィリップ・メランヒトンを具体例として論じていく。その考察をおおして、十三世紀から十六世紀までのアリストテレス主義の持続と変容とを跡づけることにしたい。

第1章 神的な天体

——アリストテレス主義の〈宇宙神学〉

「神々の本性をめぐる探究ほど、困難で曖昧模糊としたものはない」⁽¹⁾。

古代ローマの弁論家マルクス・トゥッリウス・キケロは、著作『神々の本性について』の冒頭で、そう語った。

「神」(deus) という名が、いったい何を意味するのか。彼の眼には、過去の哲学者たちが同じ対象を論じたとは思えないほど混乱しているように映ったのである。

ただし、キケロは古代の説をまとめるにあたって、中世の神学者たちが論じたような「神の存在証明」が必要とは考えなかった。なぜなら「ほとんどの哲学者は神が存在すると主張」していたからである⁽²⁾。神の存在を疑うものは彼の時代には少なかつた。それゆえ本質的な争点は別のところにあつた。その争点とは、神(神々)が、この世界や私たちの人生に、どのようなかわり方をしていのかという問題である。

神々は何もなさず、何も働きかけず、人間界の出来事にたいしては、いっさい世話も支配も行わないものなのか、それとも逆に、神々の力によって当初から万物が生み出され、構成されたのであり、事物は永遠にその支配を受け、つき動かされていくものなのか⁽³⁾。

神の世界への関与をめぐり、キケロの目の前には二つの相反する立場があつた⁽⁴⁾。一つは神が存在するとしても、